

北数教“第82回数学教育実践研究会”
兼 第18回数実研「夏季セミナー」

〈紹介〉 記数法に関する前振りネタ

「笑府」より“訓子”

レポート

日時 平成24年8月4日(土)

会場 北海道小樽桜陽高等学校

北海道室蘭栄高等学校 安田 富久一

10 進法や 2 進法などの記数法の発見が以下に大切かという説明に使える前振りの話して、漢文とのコラボも可能な話しを紹介する。

この話しは、20 年前に中国で買って来た中高生の読み物の中に書かれていた。明の時代に“笑府”という小噺集が編纂された。そこに収録されている「訓子（子に教える）」という噺である。

【訓子（子に教える）】

昔、金持ちがいた。字をまったく知らなかった。そこで、先生を招いてわが子に勉強させることにした。

先生がやってきて、まず習字の手本をなぞらせた。一筆書いて、先生は「これが“一”という字だ」、二筆書いて「これが“二”という字だ」、三筆書いて「これが“三”」。

“三”を書き終わるやその子は嬉しそうに筆を投げ捨て、喜び勇んで父親を捜しに行きこう言った。

「父さん、字なんて簡単だ。僕皆わかるようになったよ。先生はもう必要ないよ」

父親は喜び、先生を断り、帰ってもらった。

その後しばらくして、親しくしている“万”という姓の人をご馳走に招待することになり、朝早くにその子呼んで招待状を書くように言いつけた。かなり経っても出来上がってこないで、仕方なく父親は子供のところへ行き、早く書くように催促した。子供は腹を立ててこう言った「世の中には姓が一杯あるっていうのに、なんでよりもよって万という姓を付けたんだろう。朝からかかって今までにやっとなんて五百画余りが書けたきりだ」

日本では江戸小話として知られているが、この“笑府”が元になっているとのことだ。

今手元に笑府の原文が見あたらず、インターネットで調べたところ「中国哲学書電子化計画」というサイトの図書館という資料庫に原本の画像が紹介されていた。画像のため見づらいところがあるので、これから紹介する文章には私が見間違えて打ってしまった字がある可能性があると思って見ていただきたい。

【訓子】

富翁世不識字。人勸以延師訓子。師至始訓之執筆臨朱，書一畫，則訓曰一字、二畫，則訓曰二字、三畫，則訓曰三字。其子便欣然投筆，告父曰，兒已都曉字義，何煩師為，乃謝去之。踰時，父擬招所親萬姓者飲，令子晨起治狀。久之不成，父趣之。其子恚曰，姓亦多矣。奈何偏姓萬，自朝至今，□完得五百餘畫。

(注)

最後の行の□だが、普通に見つかる漢字ではなかったので、このように標記した。

岩波文庫から「笑府」(上・下)が出されており、そこには原文があるようなので(現在未確認)、原文を使う場合はご確認下さい。

また、上に示した訳はあてにしないで頂けると幸いです。